

ジャヤンタバッタのプラティバー文意論批判(1) — 『ニャーヤマンジャリー』 第五章後半の和訳研究 —

本 田 義 央

本研究は、七世紀のニャーヤ学派の学匠ジャヤンタバッタ (Jayantabhaṭṭa) の著作『ニャーヤマンジャリー』第五章の後半の〈文の意味〉 (vākyaṛtha) についてジャヤンタバッタが論じている箇所 of 翻訳研究である。¹⁾

ここでは、〈文の意味〉に関する種々の見解がジャヤンタバッタによって論破されているが、訳者が主たる関心を寄せているのは、プラティバー (pratibhā) を〈文の意味〉とする説に対する批判である。

プラティバー (pratibhā) を〈文の意味〉 (vākyaṛtha) としたのは、五世紀の文法学者バルトリハリ (Bhartṛhari) である。バルトリハリ以降、パーニニ派の文法学者 (vaiyākaraṇa) 達は、彼の説を受け継ぎ、プラティバーを〈文の意味〉としてみとめた。この説は、仏教論理学者ディグナーガによって彼の体系の中に受け入れられる一方、ニャーヤ学派やミーマーンサー学派など他学派からは批判の対象とされたことはよく知られている。「プラティバー」は、一般に、「直観」「直観知」 (intuition) と訳され、いわば超感覚的な知識をあらわす語として、インド思想に広く見いだされる。²⁾

ジャヤンタバッタは、プラティバーを〈文の意味〉とする説に関して、次のように述べている。

「一方、他の者たちは、プラティバーが文の意味であると考え。しかし、その人々の説は、[語の意味の] 〈つながり〉 (saṃsarga) として現れる知識 [が文の意味であるとする見解] を否定することによって、まさに以前に退けた。」³⁾

ここで注目されるべきなのは、文意を〈つながり〉とする説を批判するこ

とによってプラティパーを〈文の意味〉とする説を批判しえた、と述べている点である。このことから、ジャヤンタバッタは、プラティパーという知識を複数の〈語の意味〉の〈つながり〉として理解していることがわかる。プラティパーは上述のように「直観」と従来翻訳されるが、〈文の意味〉としてのそれについて、その内部構造にまで踏み込んだ研究はなされてこなかったようにおもわれる。ジャヤンタバッタの〈文の意味〉についての議論を訳出することにより、〈文の意味〉としてのプラティパーの特徴、また〈文の意味〉に関する他の説との関りを明らかにすることができるであろう。

〈底本〉

下記刊本のうち、(1)Mysore本を底本とし、(2)KSS本を随時参照する。いずれの刊本にも異読および誤植が比較的多く見受けられる。それらは必要に応じて、注記することとする。なお、翻訳中の段落冒頭の[]を付した数字は訳者による分節番号であり、それに続く()を付した数字は、(1)Mysore本の頁および行を示す。

- (1) Varadacharya, V. K. S., ed. 1983. *Nyāyamañjarī of Jayatabhaṭṭa with Tippanī-Nyāyasaurabha by the Editor*, vol. 2. University of Mysore Oriental Research Institute Series 139. Mysore: Oriental Research Institute.
- (2) Śukla, S. N., ed. 1971. *Nyāyamañjarī of Jayanta Bhaṭṭa*. Kashi Sanskrit Series (KSS) 106. Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office.

〈参考文献〉

〈一次資料〉

Śāstri, S. D., ed. 1978. *Ślokavārttika of Śrī Kumārila Bhaṭṭa with the Commentary Nyāyaratnākara of Śrī Pārthasārathimīśra*. Ratnabharati Series 3. Varanasi: Ratna Publications.

〈二次資料〉

Bhattacharyya, J. V., tr. *Jayanta Bhaṭṭa's Nyāya-mañjarī*. Delhi: Motilal Banarsidass.

Potter, K. H., ed. 1977. *Encyclopedia of Indian Philosophy*, vol II: The Tradition

of Nyāya-Vaiśeṣika up to Gaṅgeśa. Delhi : Motilal Banarsidass.

小川英世 1991「パーニニ文法学派における文の意味」『前田恵學博士頌寿記念仏教文化學論集』543-562.

川上真一 1994「クマーリラの文意論」『南都仏教』69:57-82.

服部正明 1973-75「Mīmāṃsāsīlokavārtika, Apohavāda章の研究」(上)(下)『京都大学文学部研究紀要』14:1-44;15:1-63.

<「ニャーヤマンジャリー」第五章後半の和訳>

[0] (69.8) 以上のように、<語の意味> (padārtha) が確定された段階で、今、<文の意味> (vākyārtha) を考察する。それ (<文の意味>) に関しては、賢者たちの間に、多くの異論がある。

[0.1] ある者達は、外的な (bāhya) <文の意味> はありえないから、<文の意味> は、語の意味の <つながり> として現れる (saṃsarganirbhāsa) 知識 (jñāna) にほかならない、という。

[0.2] また、ある者達は、<文の意味> は、外的なものにほかならず、語の意味相互の、実在上の (vāstava) <つながり> であるという。

[0.3] 他の者 (仏教徒) 達は、<文の意味> は、他者からの排除 (anyavyavaccheda) である、という。なぜなら、「白」などというある語が発声されるときには、[それとは別の「黒」などという語から理解されるはずの] 黒など [という意味の理解] は起こらないことが知られているからである。

[0.4] 他の者 (文法家) 達は、声高に主張する。 [<語の意味> の] <つながり> を否定することは難しい。また、それ (<つながり>) は、主要素と従属要素の関係 (guṇapradhābhāva) を原因とする。したがって、文の意味は、従属要素である行為参与者の集合によって完結されるべき主要素である行為 (kriyā) である、という。

[0.5] 他の者達 (バッター派) は [次のように] 考える。文の意味は、もたらされるべものを対象とする (bhāvyaṇiṣṭha) 人のはたらき (puruṣavyāpāra)

であり、[それは] 語根krの意味 (karotyārtha) であり、促進力 (bhāvanā) という語によっていわれるものである。一方、IINなどの語によって表示される言葉の促進力 (śabdabhāvanā) とよばれるものは、人にとって、目的の促進力の実行 (arthabhāvanānuṣṭhāna) に対する促進者 (pravartaka) であり、それは、ヴィディ (vidhi) といわれる。

[0.5.1]他の者達は[次のように]いう。ヴィディこそが文の意味である。なぜなら、IINなどの接辞が[言葉の促進力と目的の促進力の]双方を表示する[とした]場合、[IIN等に対する]負担が過剰となるからである。それ(ヴィディ)は、実行されるべきもの (anuṣṭheya) であり、[人間を行為に駆り立てる]促進者 (pravartaka) である。

[0.5.1.1]その点に関しても、二つの異なる見解がある。ある者達は、言葉 (śabda) は命令を本性とする (preṣaṇātmaka) と認める。IINなどという語から、そのように、それ(命令)が理解されるからであり、別の結果は理解されないからである。しかし、バーヴァという目的だけを結果とするという見解は、きわめて脆弱であるから、ヴィディこそが実行されるべきものである。したがって、間接的に、それ(ヴィディ)は結果である。

[0.5.1.2]一方、他の者達(プラバーカラ派)は、為さるべきもの (kārya) としてニヨーガ (niyoga) が理解されるから、間接的に、それ(ニヨーガ)が促進者 (preraka) である、と[いう見解を]支持する。理解される為さるべきものが、それ自体の実現のために人を促進する (niyūṅkte)。なぜなら、「私にとってこれが為さるべきものだ。」 (mamedam kāryam) というように理解したときに、その実現のために人は行為を開始するからである。

[0.6]また他の者達は、努力 (udyoga) と呼ばれるあらたな文の意味をとなえている。

[0.7]以上のように、[文の意味に関して]多岐にわたる意見の相違がある。そのような場合、この[文の意味はなにかという]ことに関する真実はなにか。

[1.0] (70.12) まず、この[<文の意味>は何かという]ことに関して、あ

る者達は [次のように] いう。〈文の意味〉というものが、真実のレヴェルで (pāramārthika) 外的に (bahis) 存在することは決してない。なぜなら、[われわれが言葉を聞いて理解するところの] それ (〈文の意味〉) は、〈語の意味〉とは別のもの (vyatirikta) であるか、別のものでない (avyatirikta) かのいずれかであるはずであるからである。

[1.1] (70.13) [それら二つの選択肢のうち、まず、〈文の意味〉は〈語の意味〉とは] 別のもの (vyatirikta) ではない。なぜなら、[個々の〈語の意味〉と〈文の意味〉との間の] 差異は理解されないからである。[たとえば] 「白い牛を連れてこい」(gauḥ suklā ānīyatām) というこの語の集まり (pada-grāma) に関して、種 (jāti) や属性 (guṇa) や行為 (kriyā) などという [個々の] 〈語の意味〉を離れて、どのような〈文の意味〉があるであろうか。そのような〈文の意味〉を示すことはできない。⁴⁾

[1.2] (70.16) 一方、[〈文の意味〉が〈語の意味〉と] 別のものではない (avyatirikta) [と考える] 場合、〈文の意味〉は、複数の〈語の意味〉に他ならない。[そしてそのような場合、〈文の意味〉は] [個々の〈語の意味〉] それぞれである (pratyekam) か、あるいは、集合として (sāmastyena) [の〈語の意味〉] であるかのいずれかであるはずである。⁵⁾

[1.2.1] [それら二つの選択肢のうち、まず、〈文の意味〉が個々の〈語の意味〉] それぞれであるということはない。なぜなら、[我々がそのように] 理解することはないからである。実に、[「白い牛を連れてこい」という] 〈文の意味〉が、[「牛」(gauḥ) という] 〈語の意味〉に他ならないということはない。

[1.2.2] 一方、それら [複数の〈語の意味〉が] 集合するということはない。[それは次のような理由による。] [もし複数の〈語の意味〉が、集合することがあるとすれば、] それは、存在 (sattā) にもとづいてあり得るか、理解 (praṭīti) にもとづいてありえるかのいずれかであるはずである。

[1.2.2.1] 存在にもとづいて、[文を構成する] 一連の〈語の意味〉が集合することはないから、[そのような場合には] 特定の〈文の意味〉はなら

確定されることはない。

[1.2.2.2]また、理解にもとづくとしても、[複数の<語の意味>の]集合はおこらない。なぜなら、複数の知識が同時に存在することはないから、⁶ ある<語の意味>を理解しているときに、[それとは]別の<語の意味>を理解することは不可能だからである。そして、音 (varṇa) は、<語の意味>を理解するための手段 (padārthapratītyupāya) である。それら[複数の音]もまた、同時に存在することはない。[それなのに]どうして、理解によって[複数の語の意味の]集合があるだろうか。

[1.3](71.4) さらにまた、<文の意味>は、相互につながった (itaretarasamśṛṣṭa) <語の意味>の集合 (samudāya) なのか、それとも [それとは]別様のものなのか [という疑問がある]。

[1.3.1]まず、別様のものではない。なぜなら、「牛、馬、人、象」(gaurasāvaḥ puruṣo hastī) というような [複数の語の単なる羅列の] 場合には、[<文の意味>としての意味は] 知られないからである。

[1.3.2]一方、[複数の<語の意味>の間にあるという] <つながり>も説明することは難しい。なぜなら、それ (<つながり>) は、[<語の意味>の相互の] 期待 (apekṣā) に関するからである。そして、[ある語の] 意味が、他の<語の意味>を期待する (ākāṅkṣati) ということはない。なぜなら、[<語の意味>は] 精神的なものではないからである (acetanatvāt)。[さらに、] 知識もまた、刹那的なものであるから、[個々の語の知識の間に] 相互の期待があることはない。そして、それ (相互に期待する複数の知識) にもとづく [複数の語の意味の間の] 関係 (saṃbandha) があることはない。まさにそれゆえに、<文の意味>は<つながり>ではない。なぜなら、それ (<つながり>) は、複数の [語の] 意味についてであれ、複数の [<語の意味>の] 認識についてであれ、先にのべた道理によって、[<文の意味>としては] 適当ではないからである。

[1.4](71.12) [<文の意味>としての] 差別化 (vyavaccheda) もまた、[<文の意味>としての<つながり>が否定されるのと] まったくおなじよ

うに否定されるべきである。なぜなら、それ(差別化)もまた複数の知識については、あてはまらないからである。すなわち、[クマーリラによってつぎのよう] いわれている。

「もし、「白」[という語の意味]の認識が生じる瞬間に、「牛」[という語の意味]の認識が存続しうるのならば、「牛」という語の意味の認識はそれ(「白」という語の意味の認識)とつながりうるであろうし、それ以外のものから差別化されるであろうが。」⁷⁾

[1.5](71.16)また、期待があるとしても、関係はなんら理解されることはない。たとえば、次のように[クマーリラは]いう。

「たとえ、[相互の]期待があるとしても、因果関係・結合関係・内属関係などの関係は、[語と語の間には]まったくなにも理解されない。しかし、一つの対象に存する関係は冗長である。」⁸⁾

しかし、意味の間の関係がどこかにあるとしても⁹⁾、[その関係は]言葉によって表示されることはないから、存在しないのとほとんどおなじことである。そして、差別化と<つながり>の表示者(vācaka)としての語は何も存在しない。なぜなら、[そのような語は]聞かれないからである。そして、それを表示する語が存在しないならば、それら[差別化と<つながり>]は、語の意味ではない。そして、語の意味でないものは、文の意味ではない。

それ[差別化と<つながり>]を表示する語が聞かれるとしても、過度に不適合がある。[すなわち]‘gauḥ śukla āṇīyatām saṃsargaḥ’[という場合に、理解される]意味は[一体]なになのか。したがって、外的なく文の意味>というものはどのようなあり方としてもありえないのであるから、<語の意味>の<つながり>としてあらわれる(padārthasaṃsarganirbhāsa)¹⁰⁾知識が<文の意味>である。[そして]それによってのみ、世間の活動(loka vyavahāra)は[おこる]。

[2.0](72.10)そのようなことは妥当ではない。なぜなら、外的な意味に関しては、すぐ後に、詳細に証明されるからである。そして、<つながり>としてあらわれる(saṃsarganirbhāsa)知識は、<文の意味>たりえない。¹¹⁾我々

は、外的な意味を確立せしめてから、文の意味についての考察を始めている。したがって、知識だけが文の意味であるという余地はない。

[2.1] (72.15)そして、〈語の意味〉とはことなる〈文の意味〉は存在しない。質問されたあなたは、まず、次のことを説明しなければならない。「牛」(gauḥ)という語から理解されるものとまったくおなじものが、「白い牛を連れてこい」(gauḥ śukla ānīyatām)という文から理解されるのか。それとも、それら[からわれわれが得るところの]二つの理解はことなるのか。

[2.1.2]その場合、まず、[それら]二つの理解がおなじであるということは、[われわれの]経験と相いれない。一方、[それら]二つの理解が異なる場合には、かならず、対象(viṣaya)が違うということになる。なぜなら、対象が違わないのに、[そこからわれわれが得る]理解がことなるということとは説明がつかないからである。そして、それとは異なる対象が文の意味である。単に属性(guṇa)や行為(kriyā)[を表示する]語が発声された場合でも、おなじようことがあてはめられるべきである。したがって、「付加的なもの、それが文の意味である」(yad ādhikyaṃ sa vākyaṃ)といわれている。¹²⁾

[2.2] (73.3) 複数の語の間の〈つながり〉もまた理解されないわけではない。なぜなら、「白い牛を連れてこい」[という文を聞いたときにわれわれができる〈文の意味〉の]理解は、「牛、馬、人、象」という[語の単なる羅列を聞いた]場合のつながっていない(asamśṛṣṭa)〈語の意味〉の理解とおなじではないからである。そして、このように、〈つながり〉は理解される。しかし、それは、[〈文の意味〉を]理解[するため]の手段(praṭītyupāya)である。それについては、[後ほど]十分に一切を確定するであろう。したがって、文の意味はまさしく外的なものである。

[2.3] (73.8) [文の意味が]まさしく外的なものであるならば、排除(vyavaccheda)は〈文の意味〉ではない。なぜなら、[〈文の意味〉は]肯定的な性格のものとして(vidhirūpatvena)理解されるからである。¹³⁾ また、〈つながり〉がなければ、他者からの排除もまた、説明がつかないからである。

なぜなら、「白」という語[の意味]と結びついていない (asaṃśṛṣṭa) 「牛」という<語の意味>が、「黒」など[という<語の意味>]から排除される (vyāvṛtta), というように理解されることはないからである。

「牛」という語から、すべての牛についての知識がおこるが、「牛」という語によって生み出された[その知識は]「白」という語が近接するならば、それとは別の黒などからは撤退する (apasarpati). したがって、文の意味は排除なのではないか。

そのようなことはない。なぜなら、それとは別のものの排除は、それとの関係の理解を前提とするからである。それとの関係の認識によって文の有意義性が成立する場合に、続いて黒などの排除が理解されるとするなら、そういうことにしておこう。しかし、それは<文の意味>ではない。

[3.0] (73.17) したがって、以上のように、肯定的なあり方の (vidhirūpa) 外的な文の意味が存立するとき、文の意味は行為 (kriyā) にほかならない、とある者達 (文法家達) はいう。その者達の意図は次のようなものである。

実に、期待 (apekṣā) と適合 (anugūṇa) という相互の特殊な関係のゆえに¹⁰、[行為に] 結びついた (saṃghata) 語の意味が文の意味である。

[3.1] (74.3) そして、主要素と従属要素の関係 (guṇapradhānabhāva) がなければ、<語の意味>の間の<つながり>はなりたたない。動詞 (ākhyāta) のない文は、どんな目的にも適さない。なぜなら、それ (動詞) が発声されない場合、期待 (ākāṅkṣā) は起こらないからである。また、聞き手の期待を満たす (śrotākāṅkṣānivṛtti) ために、世間では文が使用される。世間において [そうであるの] とおなじように、ヴェーダからも意味が理解される。そして、動詞からは、連続状態にある (pūrvāparībhūta) 成立せしめられるべき相の (sādhyarūpa) 意味が理解されるのであって、既に成立した (siddharūpa) [意味が理解される] のではない。その相が成立せしめられるべきものと既に成立しているものとがともに発声されるときに、なにがなにに従属するのか (kasya kiṃ tantratā) と考えたときに、成立せしめられるべきものを成立せしめるために、すでに成立しているもの [を表示する語] が使用される。こ

のように理解される。

成立させられているから、成立せしめられるべきものが主要素であると理解される。それゆえに、文の意味は、それ（成立せしめられるべきもの）にほかならない。そしてそれは、行為とは別のものではない。

<注>

- 1) Mysore本の69頁8行以降に該当する。なお当該箇所の内容は、Potter(1977:382-384)にまとめられている。また、ジャヤンタバッタ自身が認める<文の意味>は、Mysore本135頁以降に提示される。そこで彼は、「相互につながった語の意味の集合」(anyonyasaṃsṛṣṭaḥ padārthasamudāyaḥ)をもって、<文の意味>としている。
- 2) インド哲学にみられる pratibhā の様々な学派における意味については、Gopinath Kavirāj, 1923-24, “The Doctrin of Pratibhā in Indian Philosophy” 2 parts, *Annals of the Bhandarkar Oriental Institute* 5: 1-18, b113-132 を参照せよ。
- 3) Mysore本141.16-17: anyais tu pratibhā vākyārtha iṣyate / tatpakṣas tu saṃsarganirbhāsajñānirākaraṇena prāg eva pratikṣīppaḥ /
- 4) KSS本は、Mysore本の ‘-padārthavyatirekeṇa ko 'sau vākyārthaḥ, sa na darśayitum śakyate / avyatireke tu’ の部分を欠いている。その場合、この箇所は、「[白い牛を連れてこい]というこの語の集合に関して、種や属性や行為などという語の意味こそが<文の意味>である [が、それは個々の語の意味が] 個別的に [<文の意味>であるのか] それとも集合として [<文の意味>であるの] か、のいずれかである。」と訳せるであろう。
- 5) *Ślokavārtika*, Vākyādhikaraṇa k. 102cd-103ab: padārthān eva vākyārthaṃ yaḥ sāmastyena manyate // gaur aśva puruṣo hastīy atrāpy asya prasajyate / Nyāyaratnākara: *na ca padārtha eva vākyārthah* (Śābharabhāṣya) iti bhāṣyam tasyārtham āha / tenārthāntārānvarūpo viśeṣo vākyārtho na padārthā eveti /
- 6) Mysore本の読み ‘yugapadbhāvitvena’ をKSS本に従い ‘ayugapadbhāvitvena’ に改める。
- 7) yadi dhriyeta gobuddhiḥ śuklabuddhijanikṣaṇe / tato 'nyābhyo nivarteta saṃsṛjyētāhavā tayā // 次のSVの引用であるが、a句およびb句が若干異なる。
Ślokavārtika, Vākyādhikaraṇa, kk. 20cd-21ab: yadi dhriyata gobuddhiḥ śuklabuddhi-

- janikṣaṇe // tato 'nyābhyo nivartteta saṃsṛjyeta tathānāyā /
 なお, *Ślokavārttika*, Vākyādhikaraṇaにおけるsaṃsargaとbhedaについては, 川上 [1994] に詳しい。
- 8) 前半は, *Ślokavārttika*, Vākyādhikaraṇa kk. 13cd-14ab: apekṣaṇe 'pi sambandho na-iva kaścit pratīyate /
 kāryakāraṇasaṃyogasamavāyādilaṅkaṣaṇaḥ //の引用であるが, 後半の'ekārthavṛttiprāyas tu sambandho 'tiprasajyate'の部分は, *Ślokavārttika*には見いだされない。*Ślokavārttika*の14cdは, 'ekārthasamavāye 'pi sarveṣāṃ vyomni tulyatā'である。
- 9) Mysore本kacidは誤植。KSS本によりkvacidにより訂正する。
- 10) Mysore本padārthasarganirbhāsaṃは誤植。KSS本によりpadārthasaṃsarganirbhāsaṃと読む。
- 11) この箇所には, Mysore本, KSS本いずれにも問題がある。KSS本は, saṃsarganirbhāsaṃ jñānaṃ vākyārtho bhavitum arhatiと読み, Mysore本は, ca saṃsarganirbhāsaṃ jñānaṃ vākyārtho bhavitum arhatiと読むが, この箇所は, 直前に述べた<つながり>としてあらわれる知識が<文の意味>であるとする見解を退けているわけであるから, 目下の箇所は否定辞を補って理解されるべきである。したがって, ここでは, 'na ca saṃsarganirbhāsaṃ jñānaṃ vākyārtho bhavitum arhati'と読む。なお, Mysore刊本は, 'ca'の前にスペースが入っており, おそらく'na'が欠落したのであろうと思われる。
- 12) Mahābhāṣya on P2.1.1からの引用。詳しくは, 小川 [1991] を見よ。
- 13) *Ślokavārttika*, Apohavāda k. 110: vidhirūpāś ca śabdārtho yena nābhypagamāyate / na bhaved vyatireko 'pi tasya tatpūrvako hy asau // (服部訳(1973-75(下)):21-22「肯定的性格の語というものを [先ず] 認めない者にとっては, [他の語の] 否定 [としての語] もないであろう。後者は前者を前提としているからである。」 Nyāyaratnākara: vācyavad eva vācako 'pi vidhirūpe 'naṅgikṛte parasparāśrāyapatir ity āha / vidhirūpagośabdasiddhau tadvyatireko 'gośabdasiddhiḥ tad abhāve tv agośabdasiddhau tadapohātmakagośabdāsiddhiḥ, tatsiddhau ca gośabdasiddhiḥ itfaretarāśrayaḥ syāt / śabdārtha iti śabdarūpo 'rtha iti //
- 14) KSS本は, Mysore本: apekṣānugūṇānyonyavyatiṣaṅgaviśeṣataḥをapekṣānugūṇānyonyavyatiṣaṅgaviśeṣatāḥと読むが, この読みはとらない。

Jayantabhaṭṭa on Sentence-meaning(*vākyārtha*)(1) : A Translation of *Nyāyamañjarī* : Chapter 5

Yoshichika HONDA

This paper consists of a translation of chapter 5 (only the latter half) of Jayantabhaṭṭa's *Nyāyamañjarī*, where Jayantabhaṭṭa argues about sentence-meaning(*vākyārtha*).

Jyantabhaṭṭa discusses various kinds of sentence-meaning in the chapter. But the main purpose of this article is to clarify his criticism of the views that *pratibhā* is sentence-meaning. The view can be rejected, Jayantabhaṭṭa maintains, by refuting the view that sentence-meaning is knowledge which appears as on unification of word-meanings(*saṃsarganirbhāsajñāna*).

The following is the synopsis of the portion of the text translated in this paper :

0.Introduction : Different views on sentence-meaning.

1.Sentence-meaning is not something external(*bāhya*)but knowledge(*jñāna*)

2.Jayanta's refutation : Sentence-meaning is something external.

3.Sentence-meaning is an action(*kriyā*). [Grammarian's view]

(To be continued)